

### 漢詩の読み方 : 王之涣「鶴鵲楼に登る」について

黒田, 真美子

---

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

62

(開始ページ / Start Page)

111

(終了ページ / End Page)

111

(発行年 / Year)

2000-07-08

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020135>

# 通信 そとぼり

No. 38

## 漢詩の読み方

—— 王之渙「鶴鵲楼に登る」について ——

黒田真美子

盛唐の辺塞詩人、王之渙（六八八—七四二）の作に「鶴鵲楼に登る」と題する有名な五言絶句がある。

白日依山盡 白日 山に依りて尽き

黄河入海流 黄河 海に入りて流る

欲窮千里目 千里の目を窮めんと欲して

更上一層樓 更に上る 一層の楼

白と黄色の色彩的対比から始まる全対格の詩で、特に転結句は「流水対」（意味内容が上句から下句へ、水が流れるように繋がる対句）の例として、広く知られている。このように技巧的作品でありながら、その技巧を少しも感じさせず、悠然たる大らかさを見出し得よう。それは主に起承句で歌われる風景の壮大さに起因するが、従来起句の解釈に二説あった。その一つは、夕陽が西の山によりそうようにして沈むというもの。その二は、山西省永濟県の西南に建つ鶴鵲楼の西方には山がないから、白昼の太陽が山際まで空一杯に光を広げているという現実的地理的解釈である。ここに最近、第三の説を読んだ。それは訳文としては第一の説と同じだが、夕陽が沈む山とは「現実の、目に見える山ではなく、目には見えないけれども地平線の果てにあるであろう山」（川合康三『終南山の変容』研文出版）という解釈である。さすが承句の海も実際、現実には見えない海であり、黄河が東流したその果ての海である。つまり起承の対句は「西と東の極限、そこに収束しようとする太陽と黄河のダイナミックな運動」を想像した「不可視の窮極」を表現している。いわば「宇宙論的なレベルで知覚された広大さ」である。そこに太陽と黄河の流れという古来からの時間の象徴を配することにより、宇宙的スケールの「時間と空間との力動的交叉」が実現されるのである。

漢詩を読む際、実証的背景や基本的事実を押えることは不可欠である。だがそれと同時に、いやそれ以上に大切なのは、目に見えないものを見、耳に聞えないものを聞くことではないだろうか。右の解釈は、正にそのことを物語っているといえよう。